23.　超音波ガイド下仙骨硬膜外ブロック

越谷病院　麻酔科
神島啓一郎，久野裕一郎，新井丈郎，井上　久，奥田泰久

【目的】仙骨硬膜外ブロックにて超音波ガイド下にて施行することにより感触に頼らなくても確実に投与でき，なおかつ成功率の上昇と施行時間の短縮となるような方法であることを検討した．

【方法】今回の使用した超音波はsono site micro maxx，プローベはリニアプローベを使用．

体位は側臥位，もしくは腹臥位で，その場合下腹部から骨盤の下に大きな枕などを置き，足関節を内転させる．上後腸骨棘と尾骨を出来る限り確認し目星をつける．

上後腸骨棘から尾骨付近を走査し，仙骨裂孔を描出する．仙骨裂孔の中央にプローベの中心を合わせる．

25Gの針を使用し交差法にて行うが，この場合，針自体は描出されづらいが組織を圧排する像が見られる．靭帯を貫通する感触が得られたら，吸引試験後に試験用の生理食塩水などを注入する．硬膜外腔に針先が到達していたら靭帯と仙骨背面部の間に拡がりとともに液体の充満像が見られる．

【考察】超音波を用いることにより仙骨硬膜外ブロックを施行する時の穿刺点の決定，刺入方向，硬膜外への針先の位置を確認する事ができると思われた．

仙骨硬膜外ブロックは頻度が高く用いられているブロックであるが失敗例は存在する．それは仙骨裂孔の触診による位置確認困難ばかりではなく仙骨そして仙骨裂孔の解剖学的な多様性にも原因はある．超音波ガイド下法はそのようなブロック困難例に対して有効性が高いと考えられた．

【結語】仙骨硬膜外ブロックにおける超音波ガイド下の有用性を検討した．仙骨硬膜外ブロックの補助手段として極めて有用性が高いと判断した．

24.　各種色素性皮疹に対するQスイッチ・ルビーレーザーの治療効果

越谷病院　皮膚科
七条麻衣子，大塚　勤

【目的】表皮から真皮にかけての色素性病変において，Qスイッチ・ルビーレーザーの治療効果について調べた．

【対象・方法】2006年11月から2007年10月までに色素斑を主訴に来院した患者のうちQスイッチ・ルビーレーザーの適応のある老人性色素斑38例，太田母斑2例について照射術を施行した．

【結果】老人性色素斑のうちレーザー施行1ヶ月後に色素斑が消失したのもが25例（65.8%），一過性の色素沈着が生じたものが9例（23.7%），受診しなかったための不明例が4例（10.5%）であった．また太田母斑は通常3ヶ月の間隔で複数回の照射を要する．よって2例は現在治療継続中である．

【考察】老人性色素斑は病的ケラチノサイトを破壊すれば，正常皮膚が再生する．通常1回のレーザー治療で効果が得られる．レーザー照射後の炎症後色素沈着は一過性であるため，約1～3ヶ月後には色素が消失する．また一時的に色素が増強することがあるため遮光と事前の十分な説明が必要である．太田母斑は数回の照射を要するため消失させるには長期間かかる．レーザー治療における患者の期待は大きく，そのためにもレーザー治療の適応のあるものと適応外の色素性病変を鑑別することが重要である．